

はじめに

昭和20年8月9日、原子爆弾被災により長崎医科大学と附属病院の施設と設備は壊滅的破壊を受けるとともに、教官、学生、看護婦、事務職員合わせて892名の犠牲者を出しました。大学の再建が危ぶまれましたが、10月には元大村海軍病院（現国立長崎中央病院）と新興善国民学校で講義と診療が開始され、現在の医学部に発展してきました。昭和47年に設立された原爆医学資料センターは、その後、原爆被災学術資料センター（通称、原爆資料センター）と改名され、今までに15年間の活動を続けてきました。原爆資料センターの目的は原爆被災に関する学術資料を収集保管し、原爆後障害研究に役立たせることではありますが、このことは学問的に価値あるだけでなく、廃墟から再生した医学部にとっても意義深いものであります。ここに保存資料一覧をまとめ、原爆資料センターの活動の一部をお示するとともに、皆様には広く原爆資料センターをご理解下さり、ご協力いただければ幸いです。

昭和62年3月

長崎大学医学部長

松田 源治

附属原爆被災学術資料センター長

奥村 寛